



DIYのキットで家の修理を試みる

ふじわら いずみ
(株) キャンディル 人事・総務・情報システム管掌取締役 **藤原 泉**

家のフローリングや建具についた傷を直してみませんか

本稿ではホームセンターやDIYで売っている簡単なキットを使って、家のフローリングや建具にできた傷を直すお話をしたいと思います。「もったいない精神」を発揮して、なんでも修理をして使い続けるのは、廃棄物を減らすことになり、元どおりに直ると心が安らぎます。しかし、家のフローリングや建具についた傷(写真1)を直すのは、難しいから無理だと思われていませんか?実は、意外に簡単に直せるのです^^。ぜひ、みなさんにそのノウハウを知っていただき、ご自分の家の傷を直すことに挑戦していただきたいと思っています。

そこで、具体的な直し方のお話をする前に、実はみなさんの身近で家の傷を直すサービスを提供している私たちが、日頃どんな場面で傷を直しているのかを、まずは紹介したいと思います。

家の「リペアサービス」とは?

傷やダメージを受けたら、自分で直して、また快適に使う。そんな光景は、家電や衣服ではイメージしやすいものですね。筆者の父親も、よく壊れた電気製品を分解して修理していましたし、

母親は兄のおさがりの洋服をうまく女の子向けにアレンジして作り直してくれました。

では、家の傷はどうでしょうか? ^{あまどい}雨樋が壊れたり(写真2)、屋根の瓦が飛んだりしたときは、同じ町内に住んでいた大工さんと呼んで修理してもらっていました。でも、柱についた傷や、玄関の上がり^{かまち}框[↑]にできてしまった傷は、そのまま放置されていたように記憶しています。



写真1 フローリングについた傷

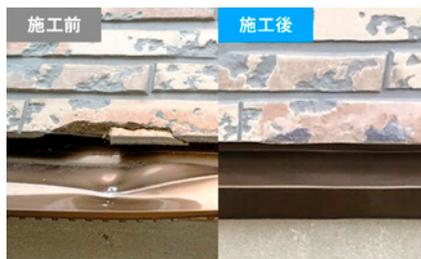


写真2 軒先の水切りにできた傷

↑ 框(かまち)とは、家の中で床の高さが変わる場所、特に玄関の上がり口や和室の床の間などでみられる、横に渡された化粧板や部材のこと

私たちの会社は、住宅や建物の内部や外部にできた傷やダメージを直し、見た目には全くわからないほど精緻なレベルまで美観を回復するサービスを提供しています。

そのサービスを「リペアサービス」と呼んでいます。「家のリペアサービス?聞いたことないけど…」とおっしゃる方が大半ではないかと思います。残念ながら、現在のところ一般の皆様には広く認知されておらず、工務店や建築会社、建材メーカー等の住宅や建物に関連する企業様向けにサービスを提供する、いわゆるB to Bのサービスが主となっています。

例えば、新築の住宅には、建築途中に多くの傷がついてしまいます。「え?新築の家に傷がつくの??」と驚かれるかもしれませんね。

実際には、柱や骨組みができ、床や壁が張られた後、お風呂やキッチンなどの大型設備が搬入される際に、小さなこすり傷や引っかき傷がつくことがあります。大工職人たちも細心の注意を払いますが、人の手で作業する以上、どうしても避けられないのです。

そんなときは私たちの出番です。リペアの技術を身につけた技術者が現場に出かけて行って、どこを直したか全くわからないレベルまで傷を直して美観を回復させます。もし、傷を直さなかったら、建築会社や大工職人はどうすることになるのでしょうか?一生に一度のような大きな買い物である「新しい家」を待っている依頼主は、たとえどんな小さな傷であっても、傷がついたそのままの状態

は受け入れられないですよね? そうなると、建築会社や大工職人は、その傷ついた部分を取り替えたり、作り直したりすることになり、余計なお金をかけて再度工事をし、使えなくなった建材は廃棄物として捨てられることになります。余計なコストがかかり、なおかつ、廃棄物も増えることになるので、いいことは何もないですよね。そこで、傷を直すリペアサービスが、建築会社や大工職人に大変重宝されているのです。もちろん、依頼主にとっても、いいことづくめです。

そんなリペアサービスを提供している私たちの会社は、ひょんなことからこのサービスを始めました。

創業のおはなし

創業者・林晃生の実体験から始まったリペアサービスは、引越し時に発生した高額な原状回復費用がきっかけでした。賃貸住宅を退去する際、家主から高額な原状回復工事の見積もりを受け取った林は、その費用の高さに困惑。そこで、宅建資格をもつ知人に相談したところ、「傷を直す道具がある」とのアドバイスを受け、ヨーロッパの家具修復技術を応用できると知りました。実際にその道具や材料を購入し、練習を重ねて傷を修復、結果的に原状回復費用を大幅に削減することに成功しました。

この経験を基に、林は「傷を直すサービスは、多くの人に喜ばれるに違いない」と確信し、リペアサービスを事業化しようと決心。しかし、「傷を直すより交換したほうが早い」といった反対の声が多かったものの、林はその信念を貫

き、リペア技術を研究・進化させ、株式会社バーンリペアを創業したのです。その後、木部だけでなく、金属や大理石、コンクリートなどの建材にも対応できる技術確立し、リペア専門の企業として成長を遂げました。現在、キャンディルグループは日本国内で最大手のリペアサービス会社として、47都道府県全てでサービスを提供しています。

また、この「直す」という発想は、重要文化財の修復にも大きな影響を与えています。リペア技術は、単に傷を修復するだけでなく、素材や状態を細かく見極め、最適な方法で本来の姿を蘇らせる繊細な作業です。特に、桂離宮や京都迎賓館、東京駅丸の内口旧駅舎などの重要文化財の修復では、極めて高い技術力が求められました。これらのプロジェクトでは、技術者の能力を試すテストを何度も経て、最終的に見た目にわからないレベルに仕上げることが成功し、大きな評価を得ました。創業当初の「交換ではなく、直すことで建物の価値を守る」という考え方が、今では歴史的建物の保存にも繋がる技術として発展しています。

この傷、自分で直す？プロに頼む？

貴重な文化財も修復できるリペア技術ですが、私たちの身近な生活の中では、そのような高度な技術を要求される場面はそう多くはありません。むしろ、日常的な傷なら、自分で直せるものも意外と多いのです。では、自分で直す傷と、プロに頼んだほうがよい傷は、どんな基準で考えていけばよいのでしょうか？次の

ような手順で考えてみましょう。

最初に、直したい傷の「素材」をチェックします。比較的直しやすい傷は、木部や紙（壁紙）等についた傷です。それらは、接着材との相性がよく、仕上げるときに着色することができるので、比較的容易に自分の手でも、きれいに仕上げられます。

一方で、石（特に玄関まわりやキッチンまわりでよく使われる大理石や人工大理石のような石類）やステンレス・鏡などのように表面がツルツルしていて、接着剤との相性もあまりよくない素材は、自分の力で直すのは非常に難しいです。これらはプロにお願いして直してもらうべき典型的な素材です。アルミはその中間に位置する素材で、器用な方なら適切な材料を使ってある程度直すことも可能です。

次に、傷の「大きさや深さ」をチェックします。表面だけにダメージがあるような、比較的小さくて浅い傷は自分で直すことができますが、傷の面積が大きくなり、しかも深くなるとプロが使用している材料や技術が必要になるため、難易度が高くなります。

最後に、傷ができてしまった「場所」をチェックしましょう。あまり人目につかない場所であれば、自分の力で直して、多少は仕上げがうまくいかなかったとしても大きな影響はないと思われます。でも、玄関の人目に付きやすい場所や、しょっちゅう人が通るような強度が要求されるような場所であった場合には、やはりプロに頼んだほうがいいのかもかもしれませんね。

まずは、これらのポイントを参考にしながら、自分で直すか、プロに頼むかを判断するといと思います。時々、自分でチャレンジしたものの、うまくいかずに傷を悪化させてしまって困っている、というご相談を受けることがあります。まずは自分で直そうとしたチャレンジ精神には敬意を感じます^^。うれしいですね！

プロに頼めば重要文化財でも使えるレベルまで直すことができる技術者もいます。

全国的にみても、その分野の頂点に立つ技術者はごくわずかですが、とても大切にしている古い家具や家が傷んでしまって困ってしまったようなときには、是非プロに相談してくださいね。

きっと、驚くほど傷がわからなくなるくらいの仕上がりにしてくれますよ！

傷のリペアに挑戦してみよう！

さあ、それでは、早速そんなリペアに挑戦してみよう！今回ご紹介するのは、DIY ショップや Web ショップを通じて販売している、一般の方向



写真3 イージーリペアキット 建築に携わっ

ていない素人の方でも気軽に手に取り、自分の家のフローリングや建具についた傷を簡単に直せるよう考えられた簡易キットです。どなたでも楽しく使えるので、安心して挑戦してください。

イージーリペアキットには、4つの道具が入っています。傷を平らにするために埋める充填剤「イージーリペアスティック」、そのスティックを溶かすための「ホットナイフ」、傷ついた面を平らにするための「ゴシゴシスクレーパー」、そして小さな「ミニヘラ」です。では、それらを使って、フローリングについた小さな傷（写真4）を直していきましょう。



写真4 フローリングについたへこみ傷

1. 傷の表面を平らにする（写真5）

まず、傷の表面をミニヘラでこすって、木が凹んだときにできたケバケバや、飛びだした木片を削り取り、表面を平らにします。

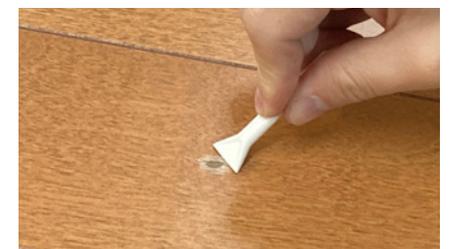


写真5 傷の表面を平らにする

2. ホットナイフでスティックを溶かす (写真6)

次に、セットの中から、修復したいフローリングの色に最も近いスティックを選びます。スティックは、ロウソクのように熱に出会うと溶ける性質を持っています。その性質を利用して、スイッチを入れて温めたホットナイフを使って、少しだけスティックを溶かし取ります。



写真6 ホットナイフでスティックを溶かす

3. 凹んだ傷を埋める (写真7)

ホットナイフに溶かし取ったスティックを、直したい傷の凹んだ部分に入れて、傷を埋めます。傷の大きさに応じて、必要な量のスティックを溶かして使ってください。



写真7 凹んだ傷を埋める

4. 隙間なくきれいに埋める (写真8)

傷の周囲部分まできれいに埋めて、周囲と色がなじむようにします。また、時間がたつとスティックで埋めた部分は乾燥して凹んでくるため、なるべく傷とスティックの間に隙間がなくなるように、丁寧に埋めていってください。

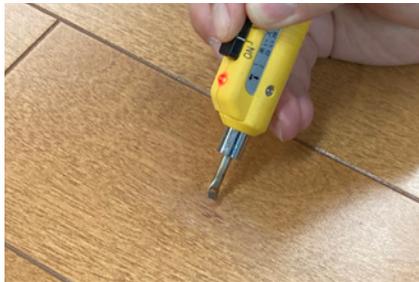


写真8 隙間なくきれいに埋める

5. 表面をならす (写真9)

傷に埋めたスティックの粗熱が取れ、落ち着いた状態になったら、ゴシゴシスクレーパーで表面をきれいにならしていきます。直した傷の表面をきれいに平らにしてあげてください。



写真9 スクレーパーで表面をならす

6. 完成! (写真10)

きれいに表面をならしたら、完成です! 周囲と色が合って、表面がスムーズになれば、ほぼ傷はわからなくなり



写真10 きれいにリペアされたフローリング

ますよ。4本のスティックに直したい傷と合う色がない場合は、スティックを混ぜて色を合わせることもできますので、それも挑戦してみてくださいね!

人の心を直すリペアサービス

いかがですか? 意外に簡単にフローリングの傷がきれいになると思いませんか? 普段生活していると、物を落としたり、引きずったりして、フローリングは絶え間なく小さな傷がついていくものです。生活していれば仕方がない、と思われるかもしれませんが、きれいになったフローリングは大変気持ちが良いものです。ぜひ、みなさんも試してみてください。

私たちの会社は、日々、皆さんのお宅に伺い、家にできたさまざまな傷やダメージを修復しています。お伺いしたとき、大切な家に傷ができてしまった家主さんは、大変悲しそうな表情をされています。奥様やお子さんが泣いてしまっていることもあります。また、時には、傷をつけてしまった引越業者や大工職人に怒鳴っていたり、大喧嘩になって険悪になったりしている現場

にお伺いすることもしばしばです。そんなとき、私たちの技術者は、最初に大切な家が傷ついて悲しい顔をされている依頼主のお話をうかがいます。その傷をどのように直してほしいのか、直した後でその部分をどのように使いたいのかなど、さまざまな要望や気持ちを聞きます。なぜ最初に依頼主の話をお伺いのかというと、傷を直すことは、すなわち依頼主の悲しい気持ちを直すことに他ならないからです。時には、「直すなんてダメだ! 全部新しいものに取り替えてくれ! せっかく一世一代の家を新築したんだ!」と仰る場合もあります。その気持ちを頭に入れて、技術者はリペア作業に取り掛かります。作業が終わり、傷ついた場所がどこだったのかもわからないレベルに仕上がった結果をみて、多くの依頼主が喜んで納得してくださいます。傷をつけてしまった引越業者や大工職人もほっと胸をなでおろしてくださいます。最後に、みんなが笑顔になって、無事にその場が収まる。リペアサービスはそんなサービスなのです。

「大切なものを直して使う」というのは、人の心を穏やかに暖かくしてくれると同時に、必要のない廃棄物を出さなくて済む、とてもエコロジカルなことであることは、いうまでもありません。ぜひ、みなさんも、物や服だけではなく、家や建材についての傷やダメージも、直すことができることを知っていただき、ご自宅のリペアに挑戦してみてください。